
経済理論 I (マクロ経済学)

柳原 光芳

第8回

第5講：消費と貯蓄（第14章）

- 現在の所得に依存「しない」消費関数はどのような形であろうか？
- なぜそのような消費関数が必要とされるのか？
- それらの消費関数とケインズ型消費関数との違いはどのようなものか？

5. 1 ケインズ型消費関数は「正しい」か？

検証するための現実のデータ

①クロス・セクションデータ:ある特定の時点での異なる(所得)階層の人々に関する(消費の)データ

②タイム・シリーズデータ:異なる時点での同じ質のもの(消費)に関するデータ

あ・長期データ...比較的長い期間(50年など)

い・短期データ...比較的短い期間(4年など)

→ ケインズ型消費関数は(①)(②い)によって支持される。

しかし、(②あ)によっては支持されない

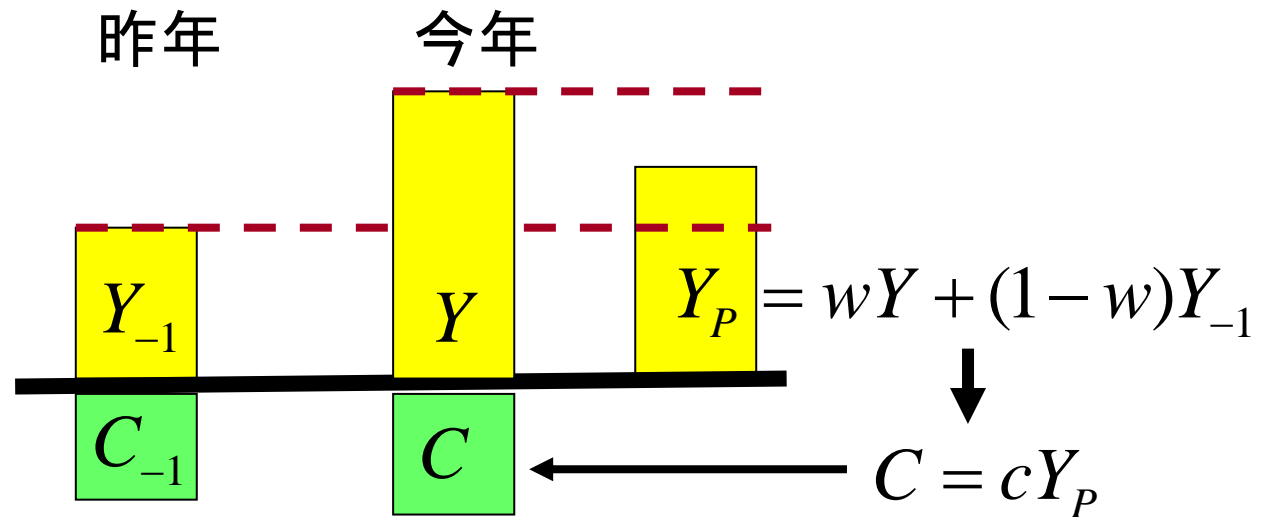
...新しい理論の必要性 (2つを同時に説明)

5. 2 短期・長期の消費関数の融合(14-2)

① 恒常所得仮説(フリードマン)

☆恒常所得(所得をならす)

☆Cはこの恒常所得(のみ)に依存:



5. 2 短期・長期の消費関数の融合(14-2)

① 恒常所得仮説(フリードマン)

(実証との整合性)

短期: Y の変動ほど消費は変動しない

長期: 経済成長(Y_p の増加)に応じて C も増加

$$Y_p = wY + (1-w)Y_{-1} \quad C = cY_p$$



$$C = cwY + c(1-w)Y_{-1}$$

短期: $c(1-w)Y_{-1}$ は定数

長期: Y と Y_{-1} は同じ

平均消費性向

$$C/Y = cw + \frac{c(1-w)Y_{-1}}{Y}$$

$$C/Y = c$$

限界 //

$$cw$$

$$c$$

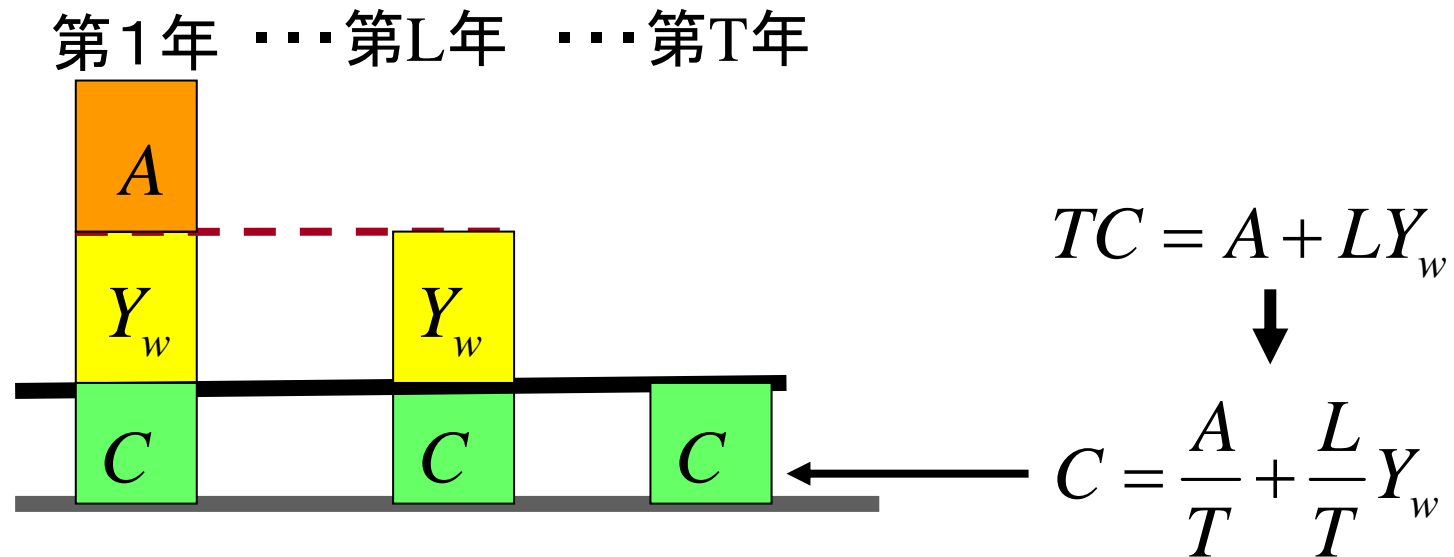
☆一時的な減税の効果は恒久減税の効果より小さい

5. 2 短期・長期の消費関数の融合(14-2)

② ライフ・サイクル仮説(モディリアーニ・安藤)

☆個人は資産を含めた生涯所得を(生涯で)均等に消費に振り向ける

(所得+資産をならす) = ライフ・サイクル仮説



5. 2 短期・長期の消費関数の融合(14-2)

② ライフ・サイクル仮説(モディリアーニ・安藤)
(実証との整合性)

短期: Y の変動ほど消費は変動しない

長期: 経済成長(Y の増加)に応じて C も増加

$$TC = A + LY_w$$



$$C = \frac{A}{T} + \frac{L}{T}Y_w$$

短期: A/T は定数

長期: $A = \alpha Y$ が成立

平均消費性向

$$\frac{C}{Y} = \frac{A}{TY} + \frac{L}{T}$$

$$\frac{C}{Y} = \frac{A\alpha}{T} + \frac{L}{T}$$

限界 //

$$\frac{L}{T}$$

$$\frac{A\alpha}{T} + \frac{L}{T}$$